

# 日本英文学会関西支部

## 第 19 回大会資料

プログラム  
研究発表・シンポジウム要旨

日時：2024年12月14日（土）11：00より

会場：関西外国語大学中宮キャンパス（〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1）

日本英文学会関西支部事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学 文学部 英米文学専攻内

E-mail: [kansai@elsj.org](mailto:kansai@elsj.org)

## 会場（関西外国語大学中宮キャンパス）までのアクセス



### 1) 京阪枚方市駅まで

JR 新大阪から約 35 分

Osaka Metro 御堂筋線で淀屋橋駅⇒京阪電車に乗り換え枚方市駅へ

JR 大阪から約 35 分

JR 大阪環状線で京橋駅⇒京阪電車に乗り換え枚方市駅へ

JR 茨木・高槻、阪急茨木市、高槻市から約 35 分

京阪バスに乗り換え京阪バス「枚方市」へ

### 2) 京阪枚方市から

徒歩：約 20 分。

京阪バス：約 8 分。「北 3 番、北 4 番」乗り場より乗車、「関西外大中宮キャンパス」下車。

※ 駐車場はありませんので自家用車でのご来場はご遠慮ください。

## 会場構内案内図



大会会場 ICC (6号館) 3階と4階

懇親会会場 ICC (6号館) 1階アマーク・ド・パラディ

\*発表会場の ICC (6号館) はキャンパス手前にあります。正門を通らず、府道から直接入場した方が便利です。建物に入りましたら、4階ホワイエの大会受付にて、参加者名簿にご記入をお願いいたします。受付は10時30分開始です。なお、当日の年会費の受付はいたしません。事前のお振込みをお願い申し上げます。

\*会場の1階に懇親会場となるカフェ&レストラン、大学近辺にはコンビニがあります。ゴミなどは必ずお持ち帰りください。

\*急な変更が生じた場合は関西支部 HP で案内いたします。支部サイトの学会情報も随時ご確認ください。  
(<https://www.elsj.org/kansai/>)

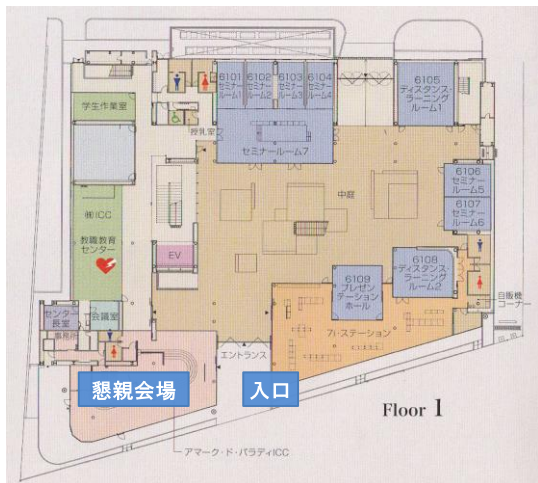
### 懇親会と託児サービス：

懇親会と託児サービスは事前予約制です。詳細は9月末ごろに関西支部 HP にてお知らせいたします。懇親会参加をご希望の方は 11月15日まで、託児サービス利用をご希望の方は 11月30日までに、関西支部 HP をご確認の上、手続きしてください。

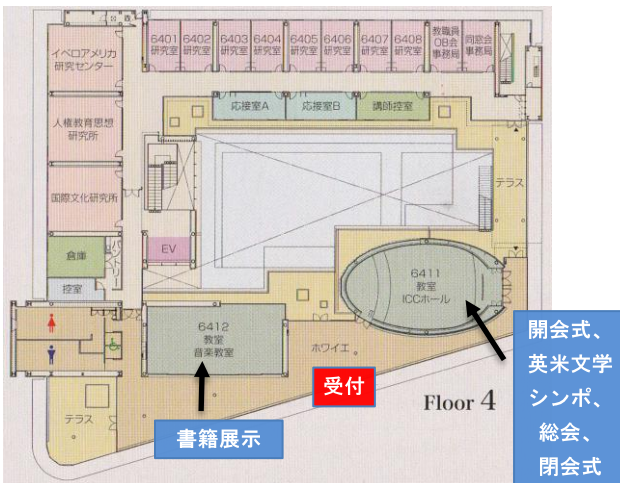


**教室案内図 ※ 大会受付はICC（6号館）4階にありますのでご注意ください。**

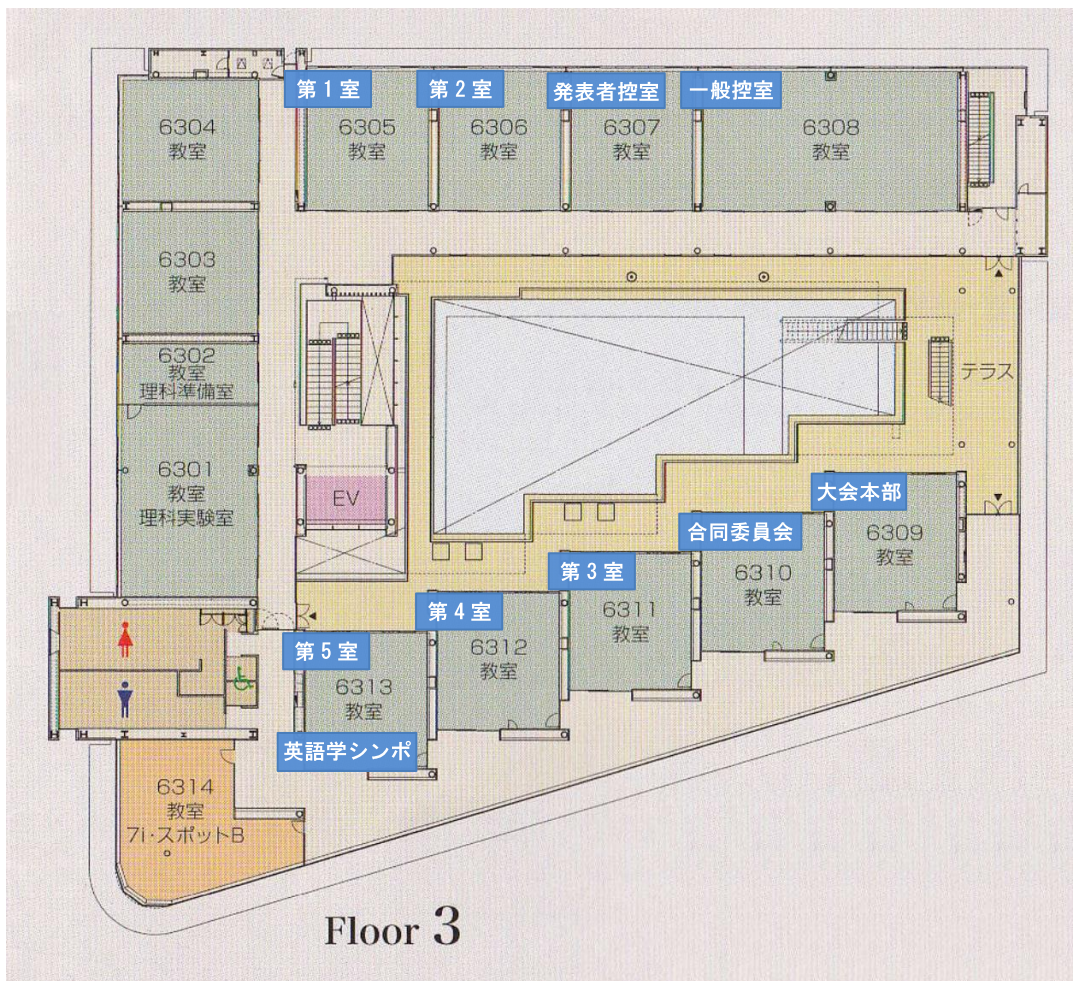
ICC（6号館）1階



ICC（6号館）4階



ICC（6号館）3階



# 日本英文学会関西支部第19回大会プログラム

日時：2024年12月14日（土）11：00より

会場：関西外国語大学中宮キャンパス（〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1）

大会受付 10：30より（ICC4階ホワイトエ） 受付、懇親会費納入

開会式 11：00より（ICCホール6411教室）

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 竹村はるみ

研究発表 第1発表 11：10～11：50 第2発表 11：55～12：35

第3発表 13：30～14：10 第4発表 14：15～14：55

第1室（ICC3階6305教室）

---

司会 同志社大学教授 白川恵子

1. *Little Women* における結婚と自己実現の探求

近畿大学非常勤講師 陳懌懿

司会 京都工芸繊維大学教授 竹井智子

2. *The Portrait of a Lady* における Isabel Archer のコスモポリタンとしての経験

同志社大学大学院生 杉山未菜実

司会 摂南大学准教授 天野貴史

3. *Beyond the Horizon* における放浪できない女性たち

大阪大学大学院生 永田優衣

司会 京都府立大学准教授 後藤篤

4. 【招待発表】修正論再訪—*Lolita* のもう一つの矛盾

京都大学名誉教授 若島正

第2室（ICC3階6306教室）

---

司会 大阪大学特任助教 中村瑞樹

1. The Nonsensical Pink Light: A Lacanian Analysis of Philip K. Dick's *VALIS*

神戸大学大学院生 PARK Junghwan

2. Paul Auster の作品における諦念的ヒーローたち

龍谷大学講師 内田有紀

司会 大阪大学特任講師 矢倉喬士

3. ダンテとピンチョンにおける歴史と「見る」こと  
—アウエルバッハの『神曲』論から『V』を読み直す

大阪大学教授 石割隆喜

司会 同志社女子大学准教授 木島菜菜子

4. Hilary Mantel の歴史小説に観察される女性像—*A Place of Greater Safety* を中心に

大阪大学大学院生 梅川桂子

---

第3室 (ICC 3階 6311 教室)

司会 大阪電気通信大学教授 杉村寛子

1. *The Tenant of Wildfell Hall* における語り直しと男性性の表象

奈良女子大学大学院生 渡邊理恵子

2. Branwell Brontë の作品における男性像—Alexander Percy の描写を中心に

大阪工業大学講師 瀧川宏樹

司会 同志社大学教授 圓月勝博

3. 【招待発表】 サラ・コウルリッジとイギリス・ロマン主義—“On Rationalism” を中心に

同志社大学教授 金津和美

司会 大阪大学准教授 馬淵恵里

4. アンチ〈シンデレラ〉として「歩む」エリザベス・ベネット  
—『高慢と偏見』におけるジェイン・オースティンの自由な女主人公

京都大学大学院生 杉野久和

---

第4室 (ICC 3階 6312 教室)

司会 京都女子大学教授 荘中孝之

1. 学習される身体：カズオ・イシグロ『クララとお日さま』における触覚

京都大学大学院生 肖軼群

2. 【招待発表】生成 AI、対話型エージェント、チャットボットと読む英文学

京都大学准教授 南谷奉良

司会 神戸女子大学教授 野末紀之

3. 『ガストン・ド・ラトゥール』再考 ―ガストンの自己修養過程の考察―

京都大学大学院生 虹林桜

司会 同志社大学教授 川島健

4. ハロルド・ピンター『昔の日々』における語りのコントロール不可能性

神戸大学大学院生 阿部万里亜

第5室 (ICC 3階 6313 教室)

---

1. (発表なし)

2. (発表なし)

司会 京都女子大学教授 松原史典

3. 結果不定詞の意味的制約と透明化現象

関西外国語大学助教 森田竜斗

4. 【招待発表】アメリカ英語の語法をイギリス英語の語法の歴史で説明する一形態、文法、意味

関西外国語大学教授 中村不二夫

シンポジウム 15:10~17:30

英米文学部門 (ICC ホール 6411 教室)

---

英米文学における光と闇のスペクタクル

司会・講師	同志社大学教授	桐山恵子
講師	上智大学教授	小川公代
講師	京都大学准教授	合田典世
講師	関西学院大学教授	小笠原亜衣

英語学部門 (ICC 3階 6313 教室)

---

アメリカ英語方言から考える英語研究とその含意

司会・講師	大阪大学教授	田村幸誠
講師	関西学院大学教授	住吉誠
講師	国立国語研究所教授	朝日祥之

**総 会** 17:30 より (ICC ホール 6411 教室)

**閉会式** 17:50 より (ICC ホール 6411 教室)

挨拶 日本英文学会関西支部副支部長 山田雄三

**懇親会** 18:10 より (アマーク・ド・パラディ ICC) 会費 5,000 円



# 研究発表要旨

第1室 (ICC 3階 6305教室)

---

第1発表 (11:10より)

司会 同志社大学教授 白川恵子

## *Little Women* における結婚と自己実現の探求

近畿大学非常勤講師 陳憚懿

本発表では、Louisa May Alcott の代表作 *Little Women* を取り上げ、主人公ジョーに焦点を当てる。南北戦争前後のアメリカを舞台にしたこの作品で、自己実現の視点からジョーの文学と教育への情熱、そして彼女の結婚観を分析し、南北戦争前後のアメリカにおいても結婚と自己実現が両立できるというビジョンが提示されていることを論じる。ジョーは当初、恋愛や結婚が自己実現の妨げになると考え、作家を夢見ながら扇情小説を執筆していた。しかし、ベア教授の助言により、真の文学の価値を再認識する。最終的に、自身と姉妹たちの物語を率直に描くことで作家としての自己実現を果たす。また、姉メグの幸せな結婚生活を見て、ベア教授の優れた内面に触れることで、結婚観が変化する。結婚後、ジョーは夫のベア教授と共に学校を設立し、教育者としての自己実現を果たしつつ、家庭と仕事の両立も実現する。ジョーの内面的な成長と自己実現の両面で充実した生活を送る姿は、結婚と自己実現が両立できるという本小説の主張を裏付けるものと結論付けたい。

第2発表 (11:55より)

司会 京都工芸繊維大学教授 竹井智子

## *The Portrait of a Lady* における Isabel Archer のコスモポリタンとしての経験

同志社大学大学院生 杉山未菜実

1875年から1年間、パリに滞在した経験を綴った紀行文“Occasional Paris”(1878)の中で、Henry James(1843-1916)は、“cosmopolite”(「コスモポリタン」)という言葉を用いながら、異文化体験について彼の考えを表している。文化を比較するうえで重視すべきなのは、それぞれの文化の長所と短所を認知し、かつ、それに対する自分の評価を絶対視せず、ときには訂正し変化を受け入れるという柔軟性をもつことだと主張するのである。こうした、異文化に対する多様な視点や変化を受容する柔軟性は、哲学者であり、プラグマティズムの先駆者である兄の William James(1842-1910)の経験主義的な思想に通じる。本発表では、この「コスモポリタン」をキーワードに、21世紀以降、読み直しが進められてきた「国際テーマ」の作品の中の代表作である *The Portrait of a Lady*(1881)を取り上げ、William Jamesの思想を援用しつつ、結末における、ヒロイン Isabel Archerのローマ回帰をコスモポリタンとしての決断として考察したい。

第3発表 (13:30より)

司会 摂南大学准教授 天野貴史

## *Beyond the Horizon* における放浪できない女性たち

大阪大学大学院生 永田優衣

ユージン・オニールの代表作 *Beyond the Horizon* (1920) では、農家の兄弟であるアンドリューとロバート、そのどちらもが思いを寄せるルースを中心に物語が展開する。夢想家のロバートは憧れていた航海を取りやめて兄の婚約者であったルースと結婚するが、農場経営は上手くいかず妻にも責め立てられ、徐々に心身を病んでいく。

心変わりを繰り返した挙句夫を厳しく非難するルースは、いくつかのオニール作品の女性たちと同様、破壊的な性質を有する悪妻とみなされることもある。一方で本作品の女性たちは日々の労働に疲弊しているようであり、家庭に縛り付けられているようにも見える。

本発表では、放浪する男性と家庭に縛られる女性が対比されていることに注目し、単なる「悪妻」にはとどまらない女性たちの作品中での役割について分析する。さらに、女性を通じて描かれる家庭という空間の閉鎖性やその場における男性との関係性の変化について論じたい。

第4発表 (14:15 より)

司会 京都府立大学准教授 後藤篤

### 【招待発表】 修正論再訪—*Lolita* のもう一つの矛盾

京都大学名誉教授 若島正

Vladimir Nabokov の *Lolita* (1955) をめぐって、いわゆる「修正論」(revisionist reading) が1990年代に熱い議論になったことがある。Humbertの手記に出てくる数字と John Ray, Jr.のまえがきに出てくる日付から生じる矛盾が、その論理的帰結として、*Lolita* との再会場面や、*Quilty* を殺害する場面は、Humbertによる虚構だという驚くべき結論を導いてしまう。この解釈を取る Dolinin (1990) をはじめとする修正主義者たちに対して、Boyd (1995) は Nabokov が他の作品でもよく間違いを犯していると言い、その矛盾もたった一つの数字を直すだけで解消できると反論した。この議論はそこで袋小路に陥ってしまったが、本発表では、Humbert が *Lolita* と再会する場面に、これまで指摘されなかったもう一つの矛盾があることを明らかにする。その矛盾は、character-narrator としての Humbert の narration に関わる根本的なものであり、それがはらむ諸問題を考察することで、修正論を新たな角度から再検討したい。

第2室 (ICC 3階 6306教室)

---

第1発表 (11:10 より)

司会 大阪大学特任助教 中村瑞樹

### The Nonsensical Pink Light: A Lacanian Analysis of Philip K. Dick's *VALIS*

神戸大学大学院生 PARK Junghwan

An autobiographical novel written by acclaimed science fiction author Philip K. Dick (1928-82), *VALIS* (1981) has been misunderstood and maligned for its distance from its author's background as a science fiction writer, its confusing structure, and its focus on theology. By analyzing the text in *VALIS* with Lacanian psychoanalysis, the dichotomy of sanity and insanity can be subverted, creating a reading that analyzes *VALIS* without diagnosing the author. This paper strives to elevate *VALIS* from the scrutiny caused by its origins into a text containing universality and to illuminate how the novel deals with the traumatic experience of the characters.

第2発表 (11:55 より)

### Paul Auster の作品における諦念的ヒーローたち

龍谷大学講師 内田有紀

「私が物書きの生活 (a life of making sentences) という判決を言い渡されたのは 17 歳になって間なしのことだった。その判決から半世紀以上が過ぎたが、私は今も鍵のかかっている独房で大変な苦勞をしながら文をつくり続けている。」これは Paul Auster (1947-2024) の長編小説 *Baumgartner* (2023) のなかで 71 歳の主人公 Baumgartner が書く短編小説 “Life Sentence” のさわりである。この短編の語り手のモデルは作者 Auster 自身だと考えられる。というのも、執筆を生業とするだろうことを Auster が悟ったのも 17 歳の頃のことであり、彼は以降 50 年以上にわたって文をつくり続けてきた。くわえて、彼の職業選択は強い意志によるものではなく、物書きになるよりほかにないという諦念によるものだったという。この意味において、Auster は自分を a life sentence (書くという営為に生涯服する刑) を言い渡された「受刑者」とみなしていたと言えよう。主体的に進路決定をするのではなく、成り行きに従って、しつしつ事態に深入りしていくという態度は、Auster 作品における多くの登場人物に共通して認められる。本発表では、Auster の登場人物たちの主体性の欠如、あるいは諦念の態度を、とくに「古い」というテーマが顕著になる Auster の 2000 年以降の小説作品を取り上げて検討する。

第3発表 (13:30 より)

司会 大阪大学特任講師 矢倉喬士

### ダンテとピンチョンにおける歴史と「見る」こと — アウエルバッハの『神曲』論から『V』を読み直す

大阪大学教授 石割隆喜

『重力の虹』は、「百科全書のナラティブ」に分類されたとき『神曲』と比較されることとなった。『V』もまたダンテとの比較が可能なのではないか。ポストモダニズム小説とミメシスという問題を考える際に、近代の黎明期に書かれたダンテの詩との比較という手法が、パラノイア的な歴史叙述を行う小説である『V』の場合にはとりわけ有効であることを、『ミメシス』におけるアウエルバッハの『神曲』論を介して示したい。

アウエルバッハは、ダンテのリアリズムの根底には歴史を神の計画の放射と捉える歴史観があるとする。ダンテのこの歴史観は、「歴史の表面の偶然の出来事」と V なる女性の背後には「名前なき究極の陰謀」が存在するとする『V』の主人公の陰謀史観と同型である。にもかかわらず、『神曲』のリアリズムが歴史を「見る」ことを成し遂げている一方で、『V』ではそのことへの不信と疑念が前景化されている。この「見る」ことの変容に注目したい。

第4発表 (14:15 より)

司会 同志社女子大学准教授 木島菜菜子

### Hilary Mantel の歴史小説に観察される女性像—*A Place of Greater Safety* を中心に

大阪大学大学院生 梅川桂子

英国作家 Hilary Mantel (1952-2022) 初期の歴史小説 *A Place of Greater Safety* (APOGS) (1992) を取り上げる。Mantel は代表作 *Wolf Hall* の成功により Tudor 朝歴史作家のイメージが強いが、APOGS はフランス革命を描

いている。長編の歴史小説で、革命を扇動した3人の男性がナラティブの中心にいるが、その周辺にいる女性たちの描写にはフェミニズム的視点が入り入れられている。本発表ではまず、多くの人物らが交錯し場面転換が頻繁に行われる *APOGS* は、各登場人物が中心に位置する無数の部分が縫い合わされて物語全体を形作るパッチワーク構造になっていることを検証する。その構造により、*Mantel* はパリの街に無数の人物を配置でき、声を奪われた受難者＝死者らに語らせることができる。そのため、男性たちの周辺にいる女性にも男性同様の存在感が与えられている。自身も革命家たらんとする女性、言葉を習得して革命を記録しようとする女性、たび重なる出産の犠牲になる女性らについての描写に *Mantel* のフェミニズム的視点が表れていることを指摘したい。

### 第3室 (ICC 3階 6311教室)

---

第1発表 (11:10より)

司会 大阪電気通信大学教授 杉村寛子

#### *The Tenant of Wildfell Hall* における語り直しと男性性の表象

奈良女子大学大学院生 渡邊理恵子

本発表では、Anne Brontë (1820-49)の *The Tenant of Wildfell Hall* (1848)における語り直しの技法に注目し、本作品に登場する主要な男性人物の表象について考察する。この作品は Gilbert Markham が義理の弟に宛てた手紙という体裁で物語が組まれているが、その半分以上は Helen Huntingdon が自身の結婚生活を綴った日記をそのまま使用している。彼女がいかにして Arthur Huntingdon と出会い、夫の変貌に直面し、彼の好転を願い努力してきた苦悩の記録を Helen は Markham に委ねる。

これまで本作品は、ヒロインを主とした研究が多くなされてきた。しかし構造上における本作品の軸は Markham であり、また Huntingdon も同じく議論するに値する人物である。近年では男性登場人物を重視した研究が進められてはいるが、その多くは歴史的観点によるものである。そこで本発表では、女性の物語が男性によって語り直されているという前提に焦点をあてて、二重構造における語り直しと物語に登場する男性登場人物像を考察し、作中でいかなる男性性が表象されているかを追求する。

第2発表 (11:55より)

#### Branwell Brontë の作品における男性像—Alexander Percy の描写を中心に

大阪工業大学講師 瀧川宏樹

Branwell Brontë の作品は、Victor A. Neufeldt 編纂により、1827年から1848年までに執筆された作品がまとめられている。姉妹らとは異なり出版には至らなかったが、幼いころから晩年まで執筆は続けられ、1841年以降は *the Halifax Guardian* などの地方誌に詩を投稿し、実際に掲載もされていた。

Branwell の作品は、全体を通して、戦場や議会を舞台にしたものが多く、男たちは誰かと常に戦っており、最後には栄光をつかむことが求められる。Branwell は、この栄光という概念にかなり取りつかれていた。

しかしそれと並行して、Alexander Percy という英雄と対極に位置される悪漢的立場の登場人物の人生にも焦点を当てている。本発表では、この Alexander Percy の男性表象を探りたい。そして、栄光という概念に縛られていた Branwell が、なぜ悪漢の描写に惹きつけられたのか、彼にとっての悪漢を描くことの意義を探ってみたい。

第3発表 (13:30 より)

司会 同志社大学教授 圓月勝博

【招待発表】 サラ・コウルリッジとイギリス・ロマン主義— “On Rationalism” を中心に

同志社大学教授 金津和美

イギリス・ファンタジー小説の源流を辿ると、『ファンタズミオン—妖精物語(*Phantasmion: A Fairy Tale*)』(1837)に行き着く。著者サラ・コウルリッジ (Sara Coleridge, 1802-1852) はイギリス・ロマン主義時代を代表する詩人・思想家 S・T・コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の娘として知られることは多いが、彼女がオックスフォード運動という宗教論争に果敢に加わった論客であったことを知る人は少ない。本発表では、サラ・コウルリッジの生涯と作品を辿ることで、ヴィクトリア朝時代においていかにイギリス・ロマン主義の思潮が継承されたのか、オックスフォード運動という保守主義の反動的文化を背景として、彼女が献身した父親の著作再版活動、特に『省察への手引き(*Aids to Reflection*)』第5版 (1843)に補遺として添えられた論考「理性中心主義について(“On Rationalism”)」に注目することで考察したい。

第4発表 (14:15 より)

司会 大阪大学准教授 馬淵恵里

アンチ〈シンデレラ〉として「歩む」エリザベス・ベネット

— 『高慢と偏見』におけるジェイン・オースティンの自由な女主人公

京都大学大学院生 杉野久和

2023年出版『シンデレラはどこへ行ったのか』の第1章「脱シンデレラ型の原型」で、「ジェイン・オースティンのヒロインたち」が挙げられている。オースティンの小説は、いずれも女性の恋愛結婚が中心で、確かに〈シンデレラ〉と無縁であるはずがない。事実『マンスフィールド・パーク』はこの観点から繰り返し論じられてきた。だが、代表作『高慢と偏見』と〈シンデレラ〉との比較による考究は不十分である。作者と読者にとって魅力的な女主人公エリザベス・ベネットの特徴が、‘an excellent walker’ と呼ばれるほど「歩く」ことなのにもかかわらず、である。『*The Little Glass Slipper*』を副題に持つ主人公〈シンデレラ〉は、「ガラスの靴」を履き、「馬車」に乗り、「舞踏会」で王子を魅了し、「裸足」で逃走するのであり、間違いなく「足(元)」が重要なヒロインである。本発表は、アンチ〈シンデレラ〉として「歩む」エリザベスを提示し、オースティンの自由な女主人公を考察する。

第4室 (ICC 3階 6312教室)

---

第1発表 (11:10 より)

司会 京都女子大学教授 莊中孝之

学習される身体：カズオ・イシグロ『クララとお日さま』における触覚

京都大学大学院生 肖軼群

本発表は、カズオ・イシグロの長編第八作『クララとお日さま』における触覚表現に注目し、語り手クララが触覚に対する独自の認識に到達するプロセスを検証する。イシグロは登場人物の肉体の前景化を忌避する作家であり、多くの作品には主人公の外見描写がほとんど含まれていない。『クララとお日さま』においてもこの傾向が継承されているが、触覚はクララが世界を認識する上では重要な方法になっている。本作品では、主に「肘を掴む」ことに代表される、人間からの支配関係を強調する動作と、「肩に触れる」や「抱擁」

をはじめとする人間同士の愛情を伝える手段としての動作が描かれている。前者に反感を示し、後者を真似することで人間に意思疎通を図るクララだが、最終的に触覚を通して人間に自身の考えを伝達することが不可能であることを悟る。その結果、クララは身体接触ではなく、記憶を共有することで感情を伝えることに転向する。

第2発表 (11:55 より)

【招待発表】生成 AI、対話型エージェント、チャットボットと読む英文学

京都大学准教授 南谷奉良

“The Year of Generative AI” と呼ばれた 2023 年以降、急速な勢いで開発が進む生成 AI の技術に対して、英文学研究ももはや無関心ではいられないだろう。この技術は今後、画像認識や同時翻訳等の機能拡充、ユーザーの好みに最適化された対話型エージェントやチャットボットの開発と協調しながら、ますます日常生活のなかに入りこみ、私たちの手や口、足をいつのまにか動かし、コミュニケーションの様態を、言葉そのものを変える力をもつ展開が予想されている。AI による意思決定の変化や行動変容はフィクションのなかにも溶けなじみ、プライバシーや孤独、痛みや差別、労働やセックス、老いや死生観等、あらゆる人文学的テーマと結びつきながら、「人間性」を揺るがす問題を提供しつつけることだろう。この問題意識から、本発表では Kazuo Ishiguro や Ian McEwan の AI アンドロイド小説だけでなく、2023 年以降に刊行された小説群 (ex. Sierra Greer, *Annie Bot: A Novel*, 2024; Charlee Dyroff, *Loneliness & Company: A Novel*, 2024) も考察対象に含め、対話型エージェントやセックスロボット、AI チャット bot が登場するテキストを、発表時点で利用できる生成 AI を用いて読解する試みを行ってみたい。正確な引用ができることも含めて、伝統的な読解方法といかに接合できるかが重要になるだろう。

第3発表 (13:30 より)

司会 神戸女子大学教授 野末紀之

『ガストン・ド・ラトゥール』再考 ―ガストンの自己修養過程の考察―

京都大学大学院生 虹林桜

本発表では、ウォルター・ペイターの未完の小説である『ガストン・ド・ラトゥール』(1896)を取り上げ、主人公ガストンの美学を通じた自己修養の過程を論じる。ガストンは生来の宗教的性質と共に豊かな感受性を持ち合わせており、この二つの性質は、宗教に身を投じていながら感覚的世界への憧れを断じえない彼の葛藤を引き起こす。発表では、この二つの性質の関係がどのように変化していくかを、作品中の二項対立のイメージを基盤にしながら、感覚世界への誘惑がガストンに課す試練を中心に議論する。そして、『ルネサンス』等のペイターの他の著作も参照しながら、感覚世界の美がどのようにガストンの心に根付いていくかを考察する。最後に、ガストンの啓示的体験の場面において、彼が自己の二つの性質を対立ではなく、共存させることで自己修練を達成する可能性を提示する。

第4発表 (14:15 より)

司会 同志社大学教授 川島健

ハロルド・ピンター『昔の日々』における語りのコントロール不可能性



ハロルド・ピンターの『昔の日々』は田舎に住むディーリーとケイトという夫婦のもとに、ケイトの昔の友人アナが訪れることで始まる奇妙な三角関係の劇だ。劇において記憶を語ることは登場人物の力関係と連動している。登場人物たちは記憶を語ることで、自らにとって都合のよい自己や他者のイメージを構築し、他者よりも優位に立とうとしている。また、登場人物たちは相手が語った記憶を自分の立場から語り直し、自分の都合の良い形に改変することで、相手の優位を崩そうとする。

しかし、登場人物たちは必ずしも語りをコントロールできているわけではない。語られた記憶には語り手の優位を崩す要素が内包されている。また、語り直しを繰り返すことで、登場人物同士の記憶は混じり合い、登場人物たちのアイデンティティは揺らぐ。本発表ではこのような語りのコントロール不可能性に着目し、それが劇の力関係に及ぼす影響について考察する。また、他のピンター作品との比較から、このような記憶表象の意味について考察する。

## 第5室 (ICC 3階 6313教室)

---

第1発表 (発表なし)

第2発表 (発表なし)

第3発表 (13:30 より)

司会 京都女子大学教授 松原史典

### 結果不定詞の意味的制約と透明化現象

関西外国語大学助教 森田竜斗

本発表は、結果不定詞の意味的特徴に焦点を当て、当該の不定詞が様々な時間を表し得る要因として主節動詞および不定詞標識 *to* の「透明化現象」を提案することを目的としている。透明化現象とは、主節句や不定詞標識 *to* の意味が希薄化し、主節のテンス・アスペクト・モダリティなどの要素が補文動詞に転移する現象である。一般に、不定詞標識 *to* は未然的な事態を導く形式とされるが、結果不定詞によって表される時間は過去から未来までさまざまである。本発表では、まず多数の言語事実を通して結果不定詞の意味解釈に厳しい制約があることを示す。そのうえで、その要因として主節動詞と不定詞標識 *to* の「透明化現象」を提案し、この現象が結果不定詞の解釈にどのように影響するのかを独自の図を用いて説明する。本研究の特徴は「生成」よりも「解釈プロセス」に焦点を当てており、透明化現象は他の文法現象にも適用可能な新しいアプローチである。

第4発表 (14:15 より)

【招待発表】アメリカ英語の語法をイギリス英語の語法の歴史で説明する一形態、文法、意味

関西外国語大学教授 中村不二夫

*herb* の発音は、1607年 *Virginia* を皮切りとする東部13植民地が英国により北米大西洋岸につくられようとしていた頃、移民によって当時のイギリス英語 (BrE) ['ɜ:b] の発音がアメリカに運ばれ拡散されたが、祖国の BrE では19世紀から ['hɜ:b] になった。また、*watch* の発音は、BrE で [wɑ:tʃ] と発音されていた頃の音が

アメリカにもたらされたが、本国では、16 世紀末頃[wotj]に円唇化した。このような結果、アメリカ英語 (AmE) と BrE に違いが生じたと説明することができる。

発表では、AmE の fiber, gray, afterward の形態は元来 BrE 綴りであった点、seem ‘to pretend’, he don’t know, have gotten の語法は元々 BrE の語法だった点を、150 冊の日記・書簡の原始的用例収集と、コーパス利用の用例収集により証明する。

# シンポジウム要旨

英米文学部門 (ICC ホール 6413 教室)

---

英米文学における光と闇のスペクタクル

司会・講師	同志社大学教授	桐山恵子
講師	上智大学教授	小川公代
講師	京都大学准教授	合田典世
講師	関西学院大学教授	小笠原亜衣

## シンポジウムのねらい

豪華絢爛なスペクタクルといえば、ライトに照らされたステージで繰り広げられる心躍るようなショーが思い浮かぶにちがいない。様々な視覚芸術に彩られた19世紀から20世紀のロンドンやパリでは夜ごと見世物が開催され、都市そのものがひとつのスペクタクルでもあった。しかし光あふれる舞台の背後には、ややもすると闇に包まれた影の空間が潜んでいる。

あたかも舞台上でゴーストやヴァンパイアを演じるかのように、自身の身体がスペクタクル化されていったヴィクトリア朝小説の女性たち。彼女らが暗躍した闇夜の光源でもある「星」は、20世紀初頭のダブリンに現れたとき、果たしていかなる文字列を用いて「スペクタクル」を構成したのか。さらに前衛都市パリに暮らした米作家たちが、視覚的描写で創りだした登場人物たちは、視覚のきかない「夜」をどのように彷徨したのだろうか。英米文学のステージで交錯する光と闇の目眩くスペクタクルをどうぞお楽しみください。

## 回転と炎——ディケンズ『大いなる遺産』のミス・ハヴィシヤム

同志社大学教授 桐山恵子

婚約者に裏切られたショックから正気を失い、日の光が遮断された屋敷に住み続けるミス・ハヴィシヤムは外出することのない引きこもり女性である。よって花嫁衣裳を着たままロウソクの炎を見つめるミス・ハヴィシヤムに身体を活発に動かすイメージはない。しかしそんな彼女が激しく身体活動を行う時がある。それはピップの肩を掴んだまま闇の中をぐるぐると歩く回転運動であり、時に車椅子に乗ってまでも行われる回転は3時間にも及ぶ。“Witch”, “spectre”, “phantom”と形容されるミス・ハヴィシヤムは、この世のものではない存在として描かれており、回転運動を狂気のなせる業として解釈することは妥当であろう。しかし本発表ではそこからさらに踏みこみ、彼女の回転の背後には当時のスペクタクルであった「ゴシック・バレエ」に登場する幽霊の姿が透けて見えることを指摘する。さらに火事に起因するミス・ハヴィシヤムの最期にも新しい見解を加えてみたい。

## 『吸血鬼ドラキュラ』における身体のスペクタクルと〈新しい女〉

上智大学教授 小川公代

ブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』で最も「家庭の天使」を象徴する女性はミーナ・ハーカーであろう。しかし小説後半の彼女はヴァンパイアと親和性を帯びる。ヒステリーとフェミニズムの関係は「新

しい女」の表象として両義的に解釈されてきた。ヒステリー研究に取り組み、医学、病院制度、文化的表象にも関わったジャン＝マルタン・シャルコーはその転換期の人物だ。本書刊行以前からサルペトリエール病院で催眠療法を用いた臨床講義を行っていた彼は、女性を解放するフェミニズムの使徒であると同時に女性の監視者や管理者でもあった。ヴァンパイア・ハンターのヴァン・ヘルシングが精神医学の専門家であることも興味深い。19世紀に性規範から逸脱するエロトマニア等の患者として収容された女性達を家庭の役割に戻すことを意図した精神管理療法は、彼女らの身体の管理をも意味していた。本発表では性の解放と管理が女性ヴァンパイア表象にどのような影響を及ぼしていたか、彼女らの身体がいかにスペクタクル化されているかを考察する。

### 地上の星——『ユリシーズ』第17挿話の「スペクタクル」

京都大学准教授 合田典世

『ユリシーズ』第17挿話の(計画表によれば)“impersonal”な教義問答の文体が、時に“personal”な様相を呈することは、つとに指摘されてきた。本発表では、その“im/personality”を念頭に、(同じく計画表で「象徴」とされる)「星」が織りなす「スペクタクル」から、幻灯機、ミュートスコープから映画に至る新興メディアの「サイン＝予兆」を読み出してみたい。無作為(impersonal)に見える文字列からも“constellation”を見出す人間の性(personality)に依拠する本、文字によるメディアを、ジョイスは(本挿話最後の問いを借用すれば)「どこへ」向かわせようとしていたのか——。おそらくモダニズムの作家達に共有されるこの問いを考えるべく、挿話中に現れる“Utopia”なる語をひとつの鍵として“con-sider”(星読み)してみたい。

### 闇夜の彷徨とスペクタクル——バーンズ『夜の森』とヘミングウェイ『エデンの園』

関西学院大学教授 小笠原亜衣

1920年代パリでは近代絵画や前衛映画が次々に生み出され、バレエ・リュスが当代随一の画家・音楽家・服飾デザイナーを集結して誰も見たことのないアヴァンギャルドを視覚化していた。この華やかなスペクタクル都市で暮らした米作家ジュナ・バーンズとアーネスト・ヘミングウェイは、後年ともに20年代フランスを舞台とする小説を残している(『夜の森』(1936)と『エデンの園』(1986))。両作品で登場人物たちは「夜」に生の本質を見だし、描写はときに視覚のきかない闇を彷徨う感覚を生成する。同時に20年代パリで過ごしたモダニスト作家の面目躍如と言うべきか、二作品は彫刻・絵画・見世物への言及、あるいは引きずり歩く衣服や極端な日焼けといった特異な視覚的描写により、登場人物をスペクタクルとして差し出している。イメージの重層性によって人生の呪縛を描ききる両作品を、言語と視覚の相互作用に着目して考えたい。

### 英語学部門 (ICC 3階 6313教室)

---

#### アメリカ英語方言から考える英語研究とその含意

司会・講師	大阪大学教授	田村幸誠
講師	関西学院大学教授	住吉誠
講師	国立国語研究所教授	朝日祥之

## シンポジウムのねらい

Labov (2013) や Wolfram and Schilling (2006) を初めてとしてアメリカの社会言語学者が口を揃えていることに、今日マス・メディアやインターネットそして交通網が大変発達したにも関わらず、アメリカ英語においてその方言（地域変種・民族変種）の違いが現在ますます大きくなってきているということがある。その一方で、普段、英語の文法や発音が分析・議論される際に、「英語では、、、」と英語の変種を考慮に入れない抽象的な説明（あるいは無国籍な説明）が与えられることが大半ではないだろうか。本シンポジウムの狙いはデータ（考察対象）の解像度を一つ上げ、変種のレベルから「英語」を分析した場合、抽象的に想定される「英語」の記述とどのようなズレがあるのか、そして、その変種からの分析はどのような記述的・理論的含意をもたらすのかを議論することにある。

### アメリカ英語の r はどこから来たのか：アメリカ英語概説と母音推移現象に関する一考察

大阪大学教授 田村幸誠

本発表は2部構成で行う。まず、前半部は本シンポジウムのテーマであるアメリカ英語に関して、その歴史的発達と地域の特徴を概観する。主流アメリカ英語 (MAE) の主要な特徴として、特にイギリス英語 (RP) との対比で「母音の後の r (postvocalic r), e.g. star GA: /star/, RP: /sta:/'」を発音することが挙げられるが、Wolfram and Schilling (2006) らの先行研究を前提に視点を「アメリカ英語の r はどこから来たのか」という側面においてアメリカ英語の概観を行う。続いて、後半部は近年のアメリカ英語に観察される各地域変種の指標として機能している北米都市母音推移 (Northern Cities Vowel Shift) などの母音推移現象 (の違いと有無) に焦点を当てる。Thomas (2001)、Labov et al. (2006)、Ladefoged (2012) らをもとに各地域に観察される母音推移現象の記述的特徴を明確にした上で、認知音韻論の観点からその連鎖効果 (chain effect) に関して理論的動機づけを試みたいと考える。

### 地域方言変種から考えるアメリカ英語の「脱規範」

関西学院大学教授 住吉誠

Kachru (1985) は、アメリカ英語を英語学習者が従うべき規範を提供する (norm-providing) 変種のひとつと考えているが、当然のことながら norm-providing であるアメリカ英語の中にも多様性が存在する。そのような多様性はなかなか見えにくく、アメリカ地域方言で使用される表現が「標準アメリカ英語」のそれとして辞書などに掲載されている場合も珍しくない。

As the virus has rampaged through Israel in recent months, it has shaken the assumptions of some in the insular ultra-Orthodox world, swelling the numbers of those who decide they want out. (New York Times, February 8, 2021)

下線部は「出るのを望む」の意味を表し、他動詞の目的語に副詞が生じるという統語的脱規範性を示している。イエール大学で推進されている Yale Grammatical Diversity Project では、この表現を主として中西部方言としているが、一方で「標準的な」英語の辞書にはそのような地域的ラベルなしに掲載されている。本発表では、このような地域変種を概観・分析し、それが持つ脱規範性を考えることで従来の英語の文法観の見直しに迫ってみたい。

## バリエーション研究におけるアメリカ英語：その展開と他言語へのインパクト

国立国語研究所教授 朝日祥之

本報告では、社会言語学の一領域である言語変異研究 (Language Variation and Change studies, 以下、バリエーション研究と称する) を基軸とし、その対象言語の一つであるアメリカ英語におけるバリエーション研究の発生と、展開について考察する。その上で、他の英語 (カナダ英語、イギリス英語をはじめと、いわゆる World Englishes) 日本語、(カナダの) フランス語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、タイ語など言語におけるバリエーション研究の成果を取り上げる。バリエーション研究はこれまで「三つの波(three waves)」があると言われることから、それぞれの「波」の説明とアプローチを紹介する。その後、報告者が日本語におけるバリエーション研究者でもあることから、自身が関わった研究 (ニュータウン、北海道方言、日系アメリカ人の日本語研究を取り上げ、それがこの「波」とどのように関わるのかを報告する。最後に本報告の取りまとめとして、アメリカ英語のこれからの状況を捉える視点を示す。



## 大会準備委員

委員長： 田中ちはる（近畿大学）  
副委員長： 西谷茉莉子（京都府立大学）

英文学部門委員：  
三浦誉史加（大谷大学） 西垣佐理（近畿大学）

米文学部門委員：  
斎藤彩世（同志社大学） 高村峰生（関西学院大学）

英語学部門委員：  
南佑亮（神戸大学） 松原史典（京都女子大学）

開催校委員：  
服部典之（関西外国語大学）

（五十音順、敬称略）